

〈はじめに〉

「人志松本のすべらない話」という番組があります。サイコロを振って自分の名前が出た芸人が、すべらない、すなわち、うける面白話を、次々に語って行く、という内容で、ご覧になられた方も多いかと思います。この番組を見ていると、「語る」という行為の持つ特徴が、よく表されているように思います。番組が始まると出演者は、一様に「緊張する」と漏らします。それは、これから自分が語らなければならない話に対する、「責任」から来るものです。人に何かを物語る、という行為が、会話と大きく異なる点は、それが一方向的なものであり、その作業は、ただ一人の語り手に委ねられています。話の発端から終結まで、ひとつの筋が繋がって行くように、注意深く、途切れることなく、続けて行かなければなりません。非常に高度な行為と考えることができます。◆また、この番組で、語り手は、テレビを観ている不特定多数の人々を聞き手として、語りを展開します。特定の個人ではなく、文脈を共有しない人にとっても、理解でき、楽しめるように語らなければなりません。ここに、語るという行為の、もうひとつの大きな特徴、「共有性」があります。あたかも、観客の前に1本の映画を写しだすように、自分と他人との間の共有の場に、話を提示するのです。番組の中では、過去の自分の体験を語る出演者が多いのですが、登場する自分を、もう一人の語り手としての自分が、第三者的な視点で、冷静に見つめていなければ、このような共有性を生み出すことはできません。語りを可能とするためには、客観的視点もしくは思考が不可欠だということができます。◆語りの能力は、もちろん、生まれてすぐに身につくものではありません。幼児期から学童期にかけて、知識の蓄積や言語の発達、記憶力の向上などとともに、少しずつ形成されて行くものと、されています。子どもはごく自然に、語りを始めます。学校で自分が遭遇した出来事を、見たテレビ番組の内容を、家族に、友人に語ります。そのような、語りの経験を通して、子どもは他人と、さまざまな世界を共有することができるようになり、そして、その体験は、子どもを社会に開かせて行きます。また、同時に語りの成熟を通して、自分自身や世界を冷静に把握する術を身につけて行くのだと思います。◆発達障害の子どもにとって、語りは、ハードルの高い行為であると言えます。しかし、少しでも、それに近いものができるようになれば、子どもは、自分自身を、より社会的存在とさせて行くことができるのではないのでしょうか。この語りの能力を育てることを目的として、最近、「10秒映画」という教材を制作しました。今回は、「10秒映画」における語りの例なども、多く取り上げながら、お話しをして行きたいと思っています。